

出頭遺跡

—— 国道256号線道路改良事業に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 ——

1992

茅野市教育委員会

出頭遺跡

—— 国道256号線道路改良事業に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 ——

1992

茅野市教育委員会

例　　言

1. 本書は茅野市宮川安国寺出頭遺跡の国道256号線道路改良事業に伴う、発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の名称は、当初小飼通遺跡としたが、調査終了後本来の小飼通遺跡とは別の遺跡であると考え、出頭遺跡に変更した。その理由は、本文第Ⅰ章第1節、第Ⅱ章第2節で述べた。
3. 発掘調査は、諒訪建設事務所の委託事業として茅野市教育委員会が実施した。
4. 発掘調査は、平成3年10月1日から10月25日にかけて行われた。
5. 発掘現場における記録及び遺物整理は下記の調査員及び調査補助員が行った。
6. 出土品、諸記録は茅野市文化財調査室が保管している。
7. 本書の原稿執筆は、第Ⅱ章第2節を百瀬一郎が、その他を功刀司が行った。

発掘関係者名簿（文化財調査室）

室長 長田 篤

係長 鶴飼幸雄

事務局 両角一夫 清水國憲（臨時）

調査員 守矢昌文、小林深志、功刀 司、小池岳史、伊東みゆき（嘱託）、百瀬一郎（臨時）

調査補助員 赤堀彰子、牛山市弥、牛山徳博、古部美恵、杉本裕子、武居八千代、堀内 淳

発掘・整理作業参加者 小飼英男、小林音二郎、藤森 明、矢野聰美

序 文

茅野市の宮川地区安国寺は、明治、大正の頃からその存在が知られていた小飼通遺跡や、塚屋古墳、籠り塚古墳などを含む古墳群、中世の遺跡である平沢城址、諏訪氏廬所、安国寺など、重要な遺跡が多い地域です。

宮川地区での縄文時代遺跡の調査としては、茅野市教育委員会による高部遺跡の調査や、中央道建設とともに御社宮司遺跡の調査がありますが、安国寺区においては縄文時代遺跡の学術的な調査は今回が初めてのことです。調査面積こそわずかでしたが、安国寺区の縄文時代における生活の一端をうかがい知ることができました。今後安国寺区でも、宅地造成など開発とともに発掘調査の増加が予想されますが、出頭遺跡の調査成果をこれから調査研究にいかすことができると思われます。

最後になりましたが、発掘調査に御協力いただいた関係者の皆さん、調査に参加された皆さんに心から御礼を申し上げます。

平成3年3月

茅野市教育長 両角昭二

目 次

第Ⅰ章 調査経緯	1
第1節 調査にいたるまでの経過	1
第2節 調査の方法と経過	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	5
第1節 調査区の地形と層序	5
第2節 歴史環境	6
第Ⅲ章 遺構と遺物	8
第1節 遺 構	8
(1) 第1号住居址	8
(2) 土 坑	10
1. 第1号土坑	10
2. 第2号土坑	10
3. 第3号土坑	10
4. 第4号土坑	10
5. 第5号土坑	10
6. 第6号土坑	10
7. 第7号土坑	10
第2節 遺 物	12
(1) 土 器	12
(2) 石 器	13
第Ⅳ章 まとめ	20

挿図目次

- 1 第1図 遺跡位置図 (1/25,000)
- 2 第2図 遺跡周辺の地形と発掘区域 (1/2,500)
- 3 第3図 遺構分布図 (1/400)
- 4 第4図 遺跡の層序 (1/40)
- 5 第5図 第1号住居址 (1/60)
- 6 第6図 土坑 (1/60)
- 7 第7図 土器(1) (1/4)
- 8 第8図 土器(2) (1/3)
- 9 第9図 土器(3) (1/3)
- 10 第10図 土器(4) (1/3)
- 11 第11図 土器(5) (1/3)
- 12 第12図 土器(6) (1/3)
- 13 第13図 土器(7) (1/3)
- 14 第14図 石器 (2/3・1/3)

図版目次

- | | |
|--------------------|-----------------|
| 図版1-1 遺跡遠景 | 図版7-1 出土土器(3) |
| 図版1-2 遺跡現況 | 図版7-2 出土土器(4) |
| 図版2-1 重機作業風景 | 図版7-3 出土土器(5) |
| 図版2-2 作業風景 | 図版8-1 出土土器(6) |
| 図版3-1 第1号住居址遺物出土状況 | 図版8-2 出土土器(7) |
| 図版3-2 第1号住居址断面 | 図版9-1 出土土器(8) |
| 図版4-1 第1号住居址発掘状況 | 図版9-2 出土土器(9) |
| 図版4-2 調査区全景 | 図版10-1 出土土器(10) |
| 図版5-1 安国寺公民館所在の土器 | 図版10-2 出土土器(11) |
| 図版5-2 小祠神社の石棒 | 図版11-1 出土土器(12) |
| 図版5-3 小祠神社 | 図版11-2 出土土器(13) |
| 図版6-1 出土土器(1) | 図版12-1 出土土器(14) |
| 図版6-2 出土土器(2) | 図版12-2 出土石器 |

第Ⅰ章 調査経緯

第1節 調査にいたるまでの経過

国道256号線道路改良事業に伴い、茅野市宮川地区の事業用地内に所在する小飼通古墳群、千沢城下町遺跡とともに、小飼通遺跡が破壊される状況となった。平成3年5月1日に、長野県教育委員会文化課、諏訪建設事務所と茅野市教育委員会文化財調査室の三者により、道路改良事業用地内の諸遺跡に関する保護協議が行われ、小飼通遺跡に関しては、平成3年度中に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなった。この協議結果を受けて、茅野市教育委員会文化財調査室で調査日程の調整を行い、平成3年7月諏訪建設事務所と埋蔵文化財発掘調査の委託契約を締結した。平成3年8月22日付3教生第103号で埋蔵文化財発掘通知を提出し、平成3年10月1日から現地の発掘調査を開始した。発掘調査中に安国寺在住の藤森明氏より遺跡の名称に関して御教示を受け、また第Ⅱ章第1節に述べる遺跡周辺の地形などからも本来の小飼通遺跡とは別の遺跡であると考え、報告書作成時からは、遺跡所在地の小字名をとり、出頭遺跡に名称変更することとした。

第2節 調査の方法と経過

発掘調査は、平成3年10月1日から同年10月26日にかけて行なわれた。表土剥ぎ作業は、調査区が道路に隣接していることを考慮し、調査区中央から行ない、遺構および遺物の集中する部分を重機と作業員による手掘りにより拡張するという方法をとった。調査区南側より住居址、土坑が検出された。このうち第1号住居址は調査区の東側につづくと思われたが、発掘調査は調査区範囲内にとどめている（図版4-1・2）。

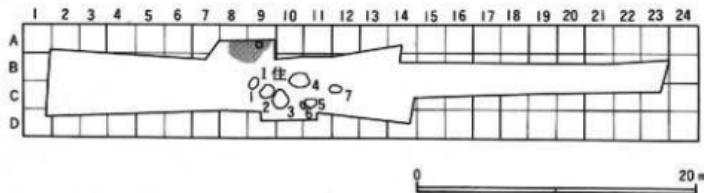
調査区は南西隅を基準とし、東西方向をアルファベットで、南北方向をアラビア数字で表示することとした（第3図）。



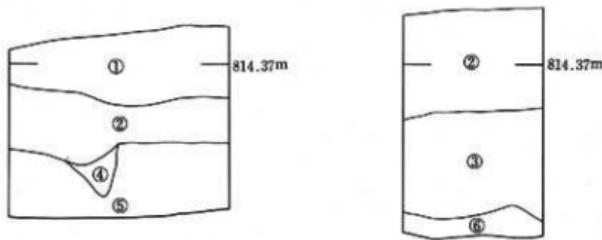
第1図 遺跡位置図 (S = 1/25,000)



第2図 遺跡周辺の地形と発掘区域 ($S=1/2,500$)



第3図 遺構分布図 ($S = 1/400$)



第4図 遺跡の層序 ($S = 1/40$)

第II章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の地形と層序

出頭遺跡は、茅野市宮川安国寺に位置し、中ノ沢川の形成する小扇状地の扇尖付近で、南北に長く東西に狭い東向きの緩傾斜面に立地する。遺跡西側は守屋山系が迫り、東は調査区から約15mで、小飼通遺跡の位置する下位の平坦面への傾斜面となる。南は中ノ沢川に、北は守屋山系より張り出した尾根にさえぎられている。この尾根の北には出頭水源がある。この水源の現状は凹地で、湧水量は豊富である（第1図、第2図）。

遺跡は畑地として利用されており（図版1-2）、黒曜石剝片、土器小片など若干の遺物の散布が認められた。耕土は深さ約60cmで、以下暗褐色土層、砂質黄褐色土層と続く（第4図）。暗褐色土層、砂質黄褐色土層ともに礫を多く含み、遺跡西側の斜面からの崩落があったと推定され、遺跡周辺の地形は不安定であったと考えられる。砂質黄褐色土層は、地表面と同様に調査区内B7グリッドを境に中ノ沢川に向って緩やかに傾斜している。

遺物包含層は、暗褐色土層である。暗褐色土層には比較的大きな炭化材が含まれていたが、この炭化材が残された時期は不明である。遺構確認面は砂質黄褐色土層の上面に設定した。

- ① 暗褐色土（耕土） 粒子は細かく、締りは極めて弱い。粘性は弱い。径0.5cm以下の砂礫を多く含むほか、径10cm以下の礫を少量含む。マルチ、石灰肥料の粒子を含む。
- ② 暗褐色土 粒子は細かく、締りは①に比べ強い粘性は弱い。径0.5cm以下の砂礫を多く含むほか、径10cm以下の礫を多く含む。炭化材、赤色粒子を少量含む。
- ③ 暗褐色土を含む砂質黄褐色土 粒子は細かく、良く締っている。粘性は極めて弱い。径0.5cm以下の砂礫を多く含むほか、径70cm以下の礫を多く含む。径20cm以下の礫が主体。
- ④ 黒色土 粒子は細かく、良く締っている。粘性は強い。径0.5cm以下の砂礫、径5cm以下の礫を穂に含む。
- ⑤ 砂質黄褐色土 粒子は粗く、良く締っている。粘性は極めて弱い。径10cmから40cmの礫を多く含む。赤色粒子を少量含む。
- ⑥ 砂質黄褐色土 ⑤に比べ、径10cm以下の礫を多く含む。

第2節 歴史環境

出頭遺跡がある茅野市宮川安国寺は守屋山東端麓にあり、古代東山道の諏訪に入る要衝としてまた中世には諏訪大祝挺城であった干沢城城下町としての大町を中心に栄えていた。安国寺村は足利尊氏、直義兄弟が、元弘の乱以降の戦没者を弔うことを目的に1336年（延元元年）発願して1345年（興國6年）2月勅許され各國に一寺ずつ建立した安国寺のひとつ信濃安国寺が小海村に創建されて村名も変わったと伝えられている。干沢城は諏訪地方で数少ない実戦記録がある城で南北に長林砦、主郭、二の郭、三の郭、四の郭が配置されて城域は550mの長さを誇っている。神長守矢満良書留によれば1483年（文明15年）1月8日前宮神殿（ごうどの=居館）で諏訪大祝継満は、諏訪領家上原城主政満、嫡子宮若丸等一族を謀殺して干沢城にたてこもった。しかし、惣領家に属してきた神長官はじめ諸豪は2月19日干沢城を急襲し、大祝一族は城を捨て高遠に敗走した。世に言う上社内乱、神殿の変である。1542年（天文11年）7月には、諏訪攻略を計る武田晴信に呼応した高遠頼繼が干沢城を攻め城下の大町（安国寺）、小町（小町屋）を焼き払った。同年9月武田に反旗を翻した頼繼は干沢城を根拠とし宮川を挟んで激戦を展開するが大敗する。以来、諏訪は40年間武田氏の統治下に入り、城代が上原城、後に茶臼山の高島城に置かれたため、干沢城下も城下町としての機能は薄れた。これらの人為的なことに加え1482年（文明14年）5月の大洪水は大町、十日市場、安国寺等の集落を押し流し、追い打ちをかけるように発生した同年7月の大暴風雨は、諏訪の平坦部の大部分を水底に沈め、田畑を礫の荒野に変えてしまった。争乱と天災で荒れ果てた安国寺を中興したのは武田晴信によって自害させられた惣領家諏訪頼重の叔父満勝である。諏訪が武田の領地になると、満勝は仏門に入り安国寺や諏訪市湖南の竜雲寺に、子の頼忠は上社大祝として隠れ住んだ。1582年（天正10年）武田氏が滅び、本能寺の変で織田信長が没すると旧臣によって領地が回復され、頼忠は諏訪の頭領となり、翌年徳川家康から正式に旧領安堵がなされた。頼忠が旧領回復をした年の10月1日満勝は安国寺で没した。現在干沢城の麓にある同寺廟所には満勝の墓碑、夫人と兄頼隆の宝篋印塔が残っている。安国寺は中興後も再三にわたる宮川氾濫で住僧もなくなり本山天竜寺との交流も絶えたが江戸時代中期以降臨濟宗妙心寺派の末寺となって現在に至っている。

安国寺区内の遺跡が本格的に調査されたのは1924年（大正13年）諏訪史第一巻で先史時代遺物発見地名表に塚屋、中ノ沢、小飼通、出頭、堂ヶ沢、芳久保が、原始時代遺物発見地名表で八株、塚ノ越、桶沢城址が、古墳調査表は範塚、塚尾を取り上げている。1929年（昭和4年）7月諏訪地方一帯の遺跡踏査を伏見宮博英氏が行い安国寺では19日に小飼通遺跡の調査を実施している。

1935年（昭和10年）8月、集落から杖突峠に登る途中で営業していた晴ヶ峰鉱泉で本館建築のため斜面を平らに整地したところ、一括になる土器片と石縄、凹石を伊藤音作氏が発見している。当時現地調査を行った矢崎源蔵氏の手記によれば住居址らしい遺構の記述が残っている。

この当時出土した土器について戸沢充則、宮坂昭久の両氏は1951年（昭和26年）『諏訪考古学』

7に「宮川晴ヶ峰発見の土器」とし資料報告を行い、30余点の縄文式土器片について15個体に分類し二群に大別され、A類は、口縁部外反、口唇部に瘤状突起や半截竹管による不規則な平行集合線文、粘土紐の貼付、竹管背による刺突文、三角形印刻文等で粗放な施文使用および土質、製作等粗雑な感じのする一群で、文様に極めて下島式（諸磯C式）的なものを残し、結論的には下島式から躊躇式、梨久保式に至る中間の一形式ではないかと推測している。B類は縄文を地文として筋節状浮線文、粘土紐および、三角形印刻文を鋸歯状に連続文等有する一群で土質、焼成、製作とともにA類に比べ、良好で、薄手のものが多く口縁部の形態も異なり、関西系の土器に近似している。両者を合わせ「晴ヶ峰式土器」と呼んだ。その後、藤森栄一氏は縄文文化の変遷をたどる中でB類=晴ヶ峰式——とした。晴ヶ峰式の呼称についてはその後再考がなされている。

1958年（昭和33年）4月、小飼通遺跡でジャガイモを蒔きつけるとき出土した土器は縄文時代後期から晩期のものが大勢を占めていた。この時、同遺跡内から加曾利E式末葉の底部のみ欠損した深鉢（口径33cm・器高60cm）が出土して、今でも安国寺公民館で区民の財産として大切に保管されている（図版5-2）。翌年5月、遺跡内にある「小飼様（こけいさま）」の石垣を積み直した際、石棒や凹石が祠のあった周辺から多量に出土、小飼マキの人々によりほとんどの出土した遺物は祠の下へ埋められて有頭石棒が一本だけ祠内に安置されている（図版5-2・3）。

安国寺区内にはかつて數十基の古墳があったとされており、塚屋通、塚屋など古墳に関係する小字も残っているが、現在はっきり古墳と特定できるものは一基もない。湮滅された古墳中で、注目するのは籠り塚である。「諏訪史第一巻」によると明治28年ころまでは、周囲28.18m、高さ5.15m芝生の小山形円墳で、墳上には小祠が置かれていた。石室の長さは7.88m、高さ1.41m、天井石は六枚からなっていた。出土品は管玉一個のみと記されている。明治29年、昭和36年の2回にわたる家屋等の増改築工事にともない消滅してしまった。36年の工事中に出土した遺物の写真を見ると須恵器、土師器の破片とともに挂甲のものと思われる小札が撮影されている。

このように遺跡分布の密度がかなり濃く、表土も浅いため区民の中には、農作業時に発見した石器、土器、滑車型耳飾などを個人で蔵している例もかなりあるが、出土地を特定できる遺物は少なくなってきた。また集落が遺跡を蚕食し、今後遺跡の集落復元は難しくなりつつある。区内の史跡保護活動、研究は諏訪大社前宮を含め「伊宮川村史編纂会」が昭和30~40年代初めにかけて盛んに活動した。昭和42年9月10日「ふるさとの歴史調査団」が結成されて史跡や遺物を當業写真家小海長明氏が撮影して、写真はその後20年間にわたり安国寺公民館に展示され広く区民の文化財に対する理解、啓蒙に役立った。現在では保護活動を「安国寺史友会」と区が一体となり行っている。

第III章 遺構と遺物

第1節 遺構

(I) 第1号住居址（第5図、図版3-1・2、4-1）

B8グリッドに位置する。遺構確認面とした砂質黄褐色土層が中ノ沢川に向って傾斜し始める地点である。遺物の分布状況からみて、住居址は調査区外に広がっていると思われる（第3図）。

住居址の平面形は調査中に確認することができず、土層観察の際、北側に掘りこみらしい痕跡が認められたのみである。P₃は斜めに掘りこまれているが、深さは約68cmで、柱穴の壁もしっかりしていた。土器片1点、黒曜石剝片1点が出土した。P₁の上面からP₂にかけて砂質黄褐色土により貼床がなされていた。

石圍炉などの施設をともなう炉址は認められず、焼土のみが3ヵ所検出された。このうち焼土1・2は貼床面上から、焼土3はP₂の底面から検出された。

遺物は貼床直上から2層内に集中するが、P₁、P₂からも若干の遺物が出土した。貼床面上の土器の高低差は、約20cmである。水平分布は限られており焼土の近くに分布する傾向がある。焼土3の上面からは土器（第7図7）がまとまって出土しており、焼土の形成後にこの土器が残されたことがわかる。

土層観察の結果は次の通りである。

① 暗褐色土

粒子は細かく、繊りは極めて弱い。粘性は弱い。径0.5cm以下の砂礫を多く含む他、径10cm以下の礫を少量含む。石灰肥料の粒子を含む。

② 暗褐色土

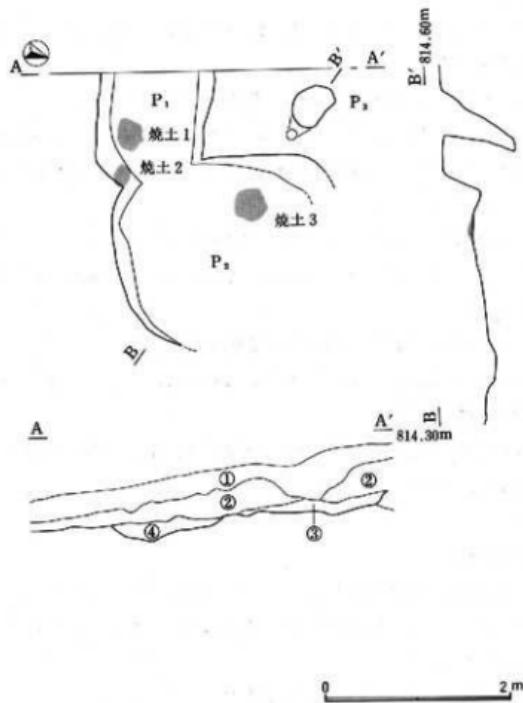
粒子は細かく、繊りは①に比べ強く、粘性は弱い。径0.5cm以下の砂礫、径10cm以下の礫を多く含む。炭化材、赤色粒子を少量含む。遺物は、この層から出土した。

③ 黒色土

粒子は細かく、繊まりはある。粘性は弱い。径0.5cm以下の砂礫を多く含む。

④ 砂質黄褐色土を含む暗褐色土

粒子は粗く、よく繊まっている。粘性は弱い。砂質黄褐色土は、②との境界線上に集中している。



第5図 第1号住居址 ($S=1/60$)

(2) 土 坑

土坑は、7基が検出された。このうち確実に土坑であると考えられたものは第4号土坑のみで、他の第1号土坑から第7号土坑は、土層観察等から礫の抜けた穴や擾乱であると考えている。

1. 第1号土坑（第6図1）

最大径83cm、最大幅72cm、深さ27cmを測る。遺物は出土していない。

土層観察の結果は次の通りである。

① 暗褐色土 粒子は細かく、締まりはある。粘性は弱い。径0.5cm以下の砂礫を多く含む。

2. 第2号土坑（第6図1）

最大径125cm、最大幅90cm、深さ27cmを測る。遺物は出土していない。

① 暗褐色土 粒子は細かく、締まりはある。粘性は弱い。径0.5cm以下の砂礫、径30cm以下の礫を多く含む。径2mm以下の炭化物粒子を少量含む。また砂質黄褐色土が斑状に入る。

3. 第3号土坑（第6図1）

最大径137cm、最大幅115cm、深さ34cmを測る。遺物は出土していない。

① 暗褐色土 粒子は細かく、締まりはある。粘性は弱い。1mm以下の赤色粒子を多く含む。

4. 第4号土坑（第6図2）

最大径154cm、最大幅99cm、深さ51cmを測る。遺物は出土していない。

① 暗褐色土 粒子は細かく、締まりはある。粘性は弱い。径0.5cm以下の砂礫を多く含む他、径3cm以下の礫を多く含む。

② 赤褐色土を含む暗褐色土 赤褐色土の部分の粒子は粗く、締まりはある。粘性は極めて弱い。径0.5cm以下の砂礫を多く含む。

③ 灰黃褐色土

5. 第5号土坑（第6図3）

最大径79cm、最大幅59cm、深さ26cmを測る。土器片1点が出土している。

① 暗褐色土 粒子は細かく締まりはある。粘性は弱い。1cm以下の礫を多く含む。

6. 第6号土坑（第6図4）

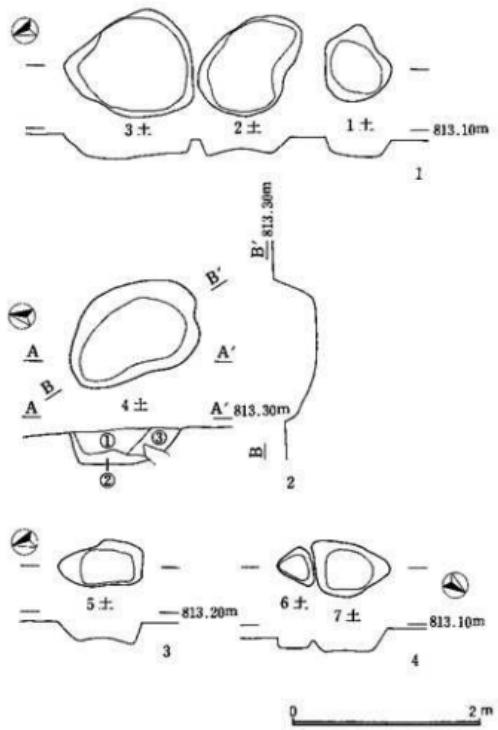
最大径41cm、最大幅35cm、深さ15cmを測る。遺物は出土していない。

① 暗褐色土 粒子は細かく、締まりはある。粘性は弱い。1cm以下の礫を多く含む。

7. 第7号土坑（第6図4）

最大径91cm、最大幅49cm、深さ23cmを測る。遺物は出土していない。

① 暗褐色土 粒子は細かく、締まりはある。粘性は弱い。1cm以下の礫を多く含む。



第6岡土坑 ($S = 1/40$)

第2節 遺 物

(I) 土 器

遺物は、第1号住居址に伴うものが大部分を占める。住居址の平面形が曖昧であること、また住居址が調査区外にも広がっていると考えられることから、今回の調査で得られた資料は、ひとまとめりの土器群の一部であるということになる。

出土した土器はすべて深鉢形土器である。器形には三種類が認められ、A 口縁部から底部に向ってすばまるもの（第7図1・2・3）、B 頸部でくびれるもの（第7図7）、C 頸部でくびれ、胴部が大きく張るもの（第7図6）がある。三種類とも、口縁部の形状は大部分が平縁であるが、第7図2のように突起をもつ土器がある。

文様には大きく分けて三種類がある。粘土紐の張り付けによる隆帯を用いたもの、棒状工具や、ヘラ状工具、あるいは半截竹管、櫛齒状工具により沈線を施すもの、もうひとつは主に繩文を施すものである。

隆帯文は、それ自体で渦巻文などの文様を描くものもあるが（第8図1・9）、沈線文や繩文と組合わされた区画文として用いられるものがほとんどである（第8図6、第12図16・19）。隆帯の両脇はなでられている（第8図6、第12図16・19）。資料数は少ない。

沈線により施文された土器は器形Aが大部分である。文様構成は単純で、口縁部には無文帯をはさんで棒状工具による沈線一条を施している（第7図1、第8図20、第9図12・17）。他に、一條の沈線の下に、沈線による楕円形の区画文を施すもの（第8図16・18）がある。口縁部が無文となるもの（第9図10・11）胴部の文様では、「匂」形区画文を施文し、胴部器面を分割したものがほとんどである（第7図1・2・6、第8図20、第9図12～17、第10図2～20）。「匂」区画の間に、さらに二条の沈線を施すものがある（第11図19～27）。区画文内の文様はヘラ状工具で施文される「ハ」の字状文（第7図1～4、第8図20・25、第9図8・10・11、第10図2～20、第11図1～43）、「ハ」の字状文が横になった矢羽根状文（第8図6・23）、斜行沈線（第9図12～16、第11図43）、櫛齒状工具で施文される綾杉状文（第9図17・18、第12図1～14）である。区画文内に蛇行沈線文を施文する土器がある（第7図2、第9図12～14・16・18、第12図1・2・16）。

繩文を施す土器は、数が少なく、破片資料が大部分であるため器形との結びつきは不明である。（第7図7、第13図1）から器形Bが含まれていることがわかる。文様をみると、隆帯で区画文を施文するもの（第12図17・19・20）、沈線で区画文を施文するもの（第7図7、第12図18・28、第13図1～3・6）が認められる。このなかで注目される資料は、結節繩文が施されている土器である。出頭遺跡出土資料のなかには全体の器形を確認できる資料はないが、第7図7から器形Bであると考えられる。これらの土器は飯田、下伊那地域を中心に出土する土器である。

結節縄文を施されている土器以外で他地域の土器であると思われるものに、第13図8がある。口縁部の破片であるが、板状の粘土を貼り付けた上に、幅の狭いヘラ状工具で連続して刺突を加え、蕨手状文を描いた土器である。類例の探索を行っていないため、確実に他地域の土器であると断言できないが、注目すべき資料ではないかと考えている。

頭部に屈曲が認められない器形、口縁部に文様帯が認められる土器、隆帶により文様要素を描き出す土器がわずかながら認められること、しかしながら出土した土器のうち、口縁部文様帯が一条の沈線文に変化し、「匚」区画文で分割された胴部器面に「ハ」の字をモチーフとする文様を施すものが主体となることから、山頭遺跡の土器群は曾利IV・V式土器であると考える。

(2) 石 器

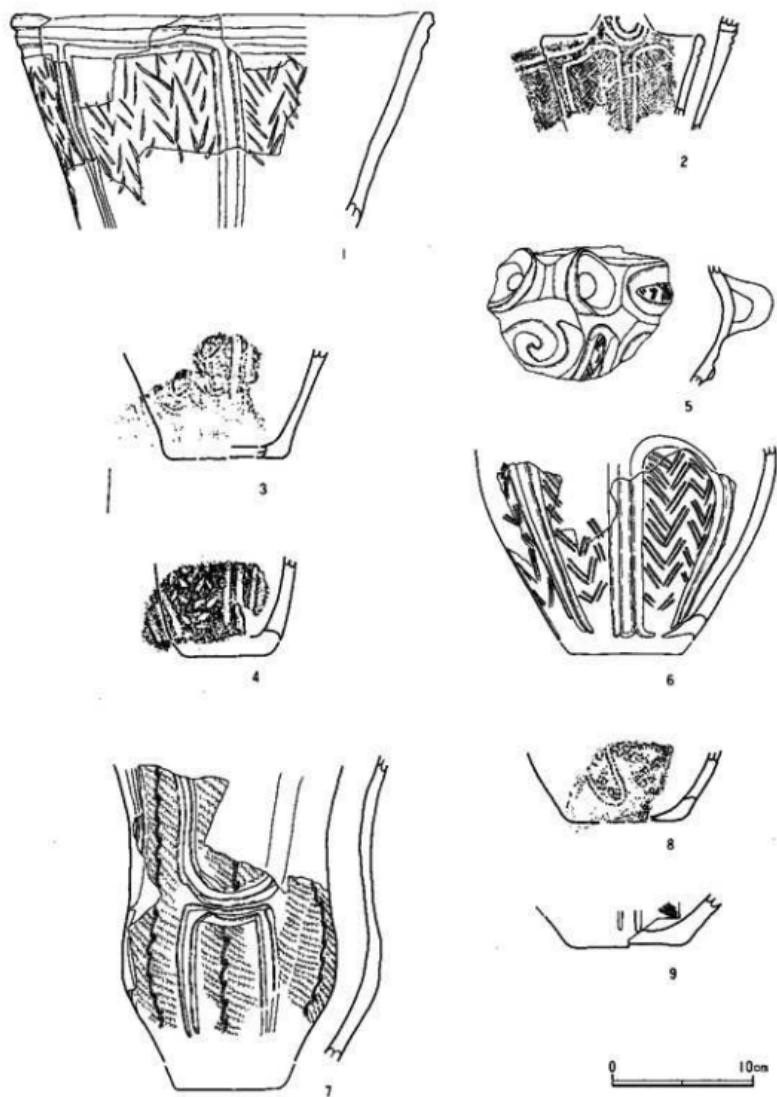
山頭遺跡から出土した石器は、石鏃1点、石錐1点、使用痕のある剥片1点、打製石斧の欠損品1点、凹石1点、石核4点、原石3点、剥片、碎片類57点の总数70点である。このほか表面採集により、石鏃1点、原石1点、剥片、碎片類6点の計8点がある。石器の分布はグリッド単位でみると、土器の分布範囲と一致している。

第14図1の石鏃は表面採集資料であるが、極めて薄い剥片を用いている。石錐（第14図3）は素材剥片にはほとんど手を加えておらず、わずかに先端部左側縁と右側縁に調整が加えられているのみである。第14図11の打製石斧は欠損品で、図の上側縁が打製石斧の側縁にあたる。硬砂岩である。

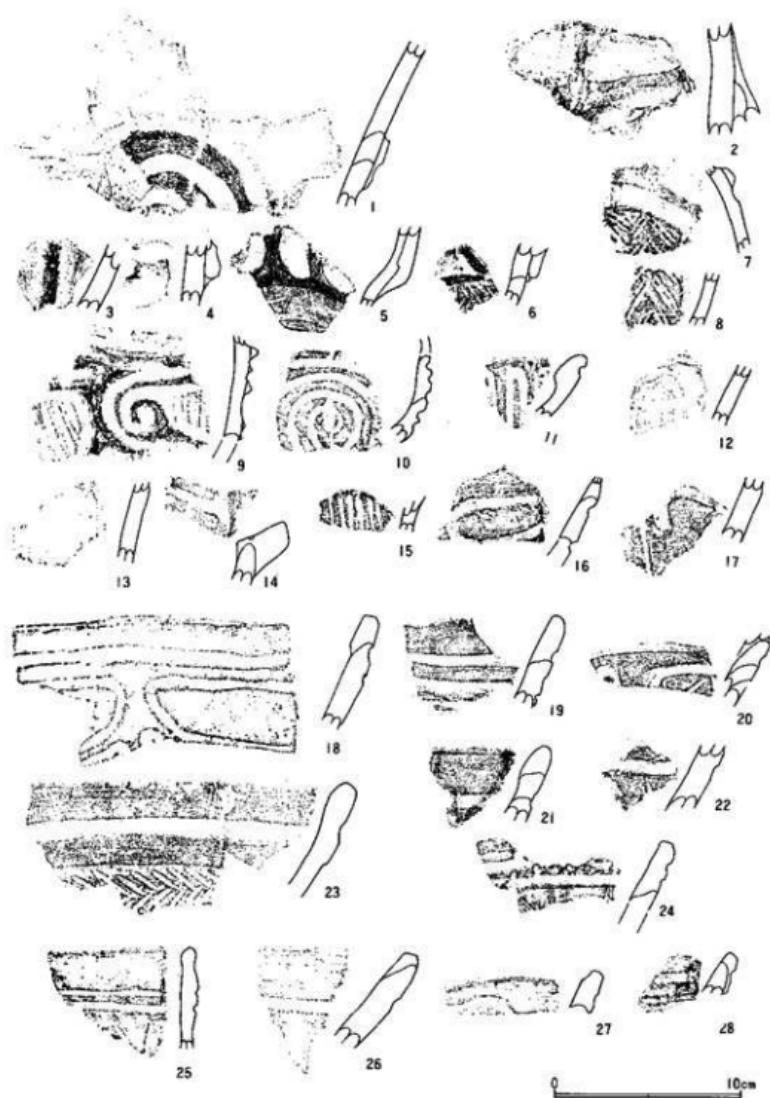
石器の生産をうかがう資料としては、原石、石核、剥片、碎片類がある。

石核には二種類があり、すべて黒曜石である。作業面が一面に固定され黒曜石の転盤を分割して製作されたもの（第14図9）、および石核の形状が柱状を呈し、作業面が複数みられ打面の転移が行なわれたもの（第14図7・8）である。作業面を観察した限りでは、石核から剥離された剥片は比較的小さい。第14図9の石核と第14図7・8の石核の作業面の剥離痕を比較すると、第14図9の石核の剥離痕のほうが若干長く幅が広い印象を受けるが、この石核と柱状の石核とが目的剥片の差異に対応して使い分けられていたかは不明である。

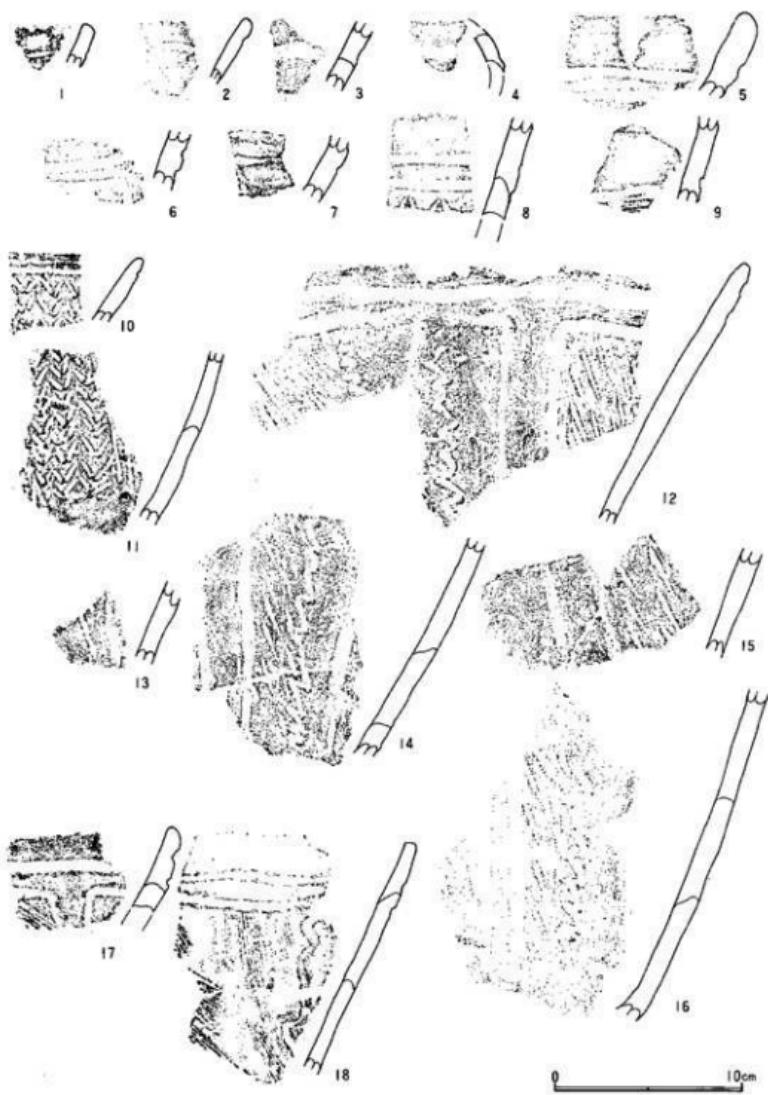
剥片の中には両極打法の存在を示す資料が出土している。第14図5・6である。ともに石質は黒曜石である。階段状剥離を伴う打点が2ヵ所認められ、対向する細長い剥離痕が認められる。両極石核は出土していない。1点のみの出土であるが、粘板岩製の横長剥片が出土している。



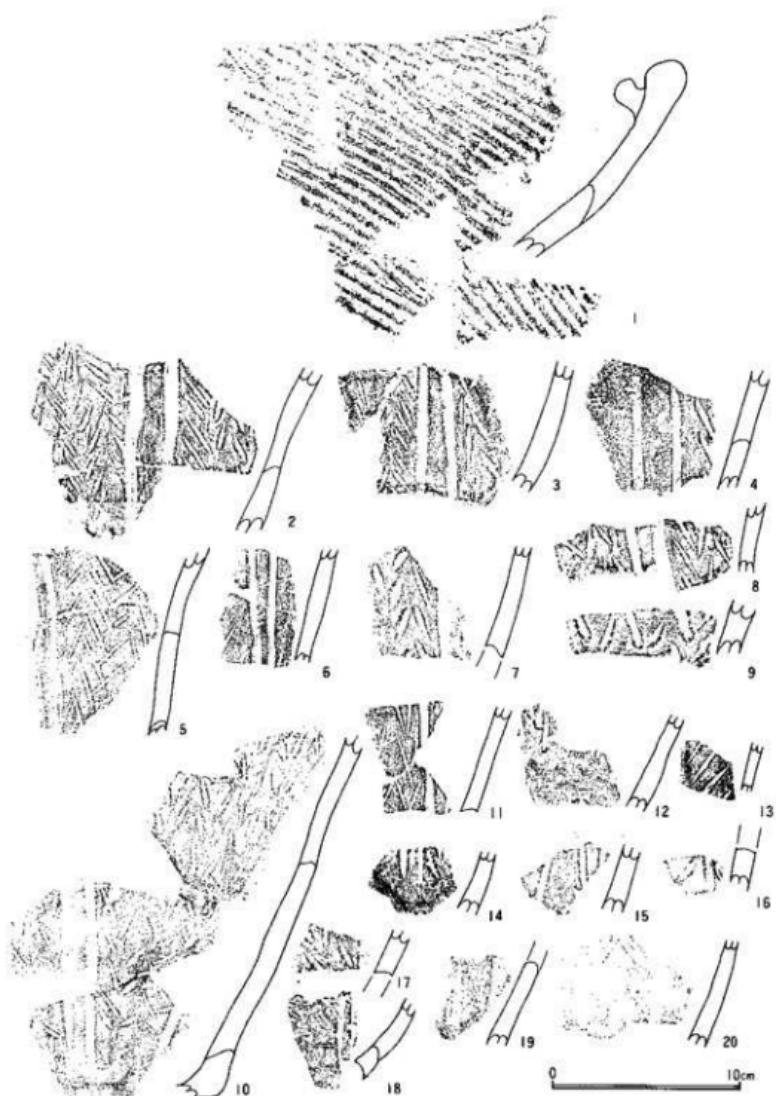
第7図 土器(1) ($S=1/4$)



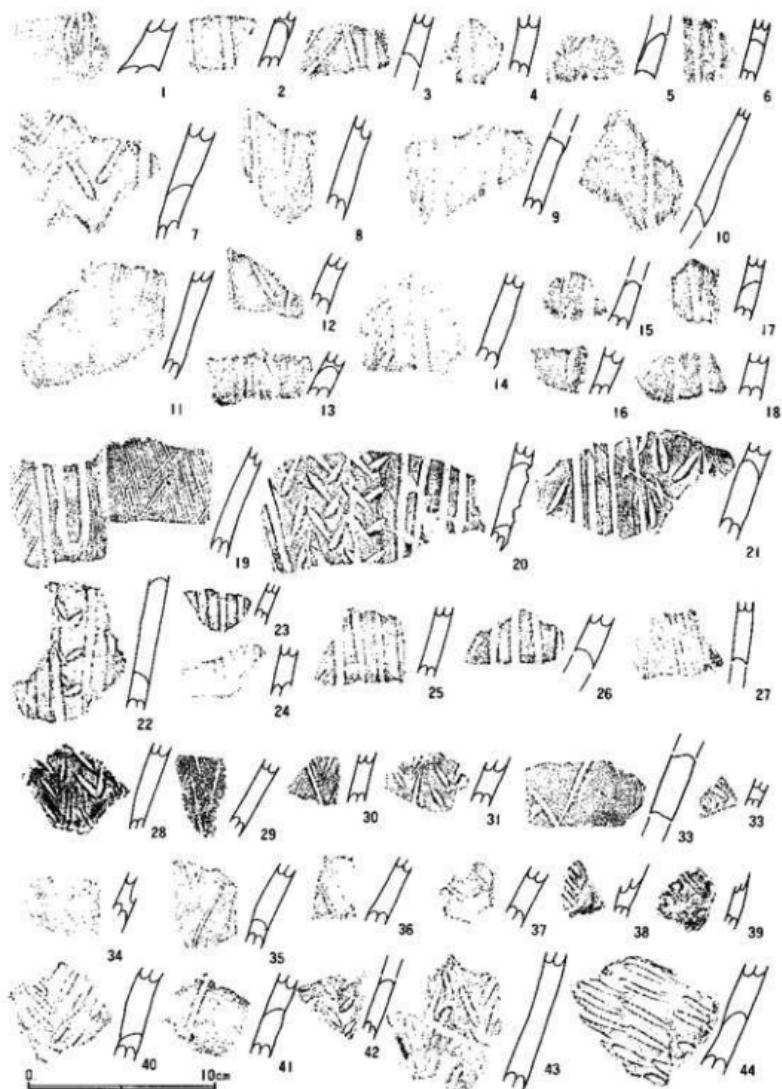
第8図 土器(2) ($S = 1/3$)



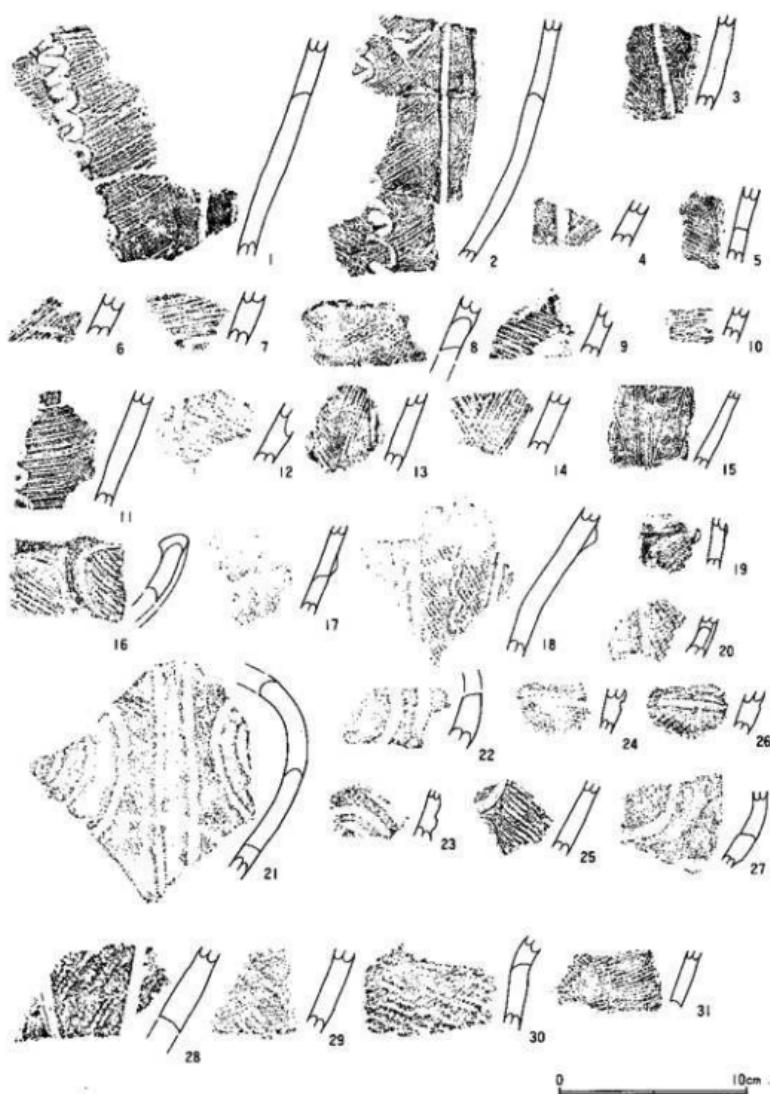
第9図 土器(3) ($S=1/3$)



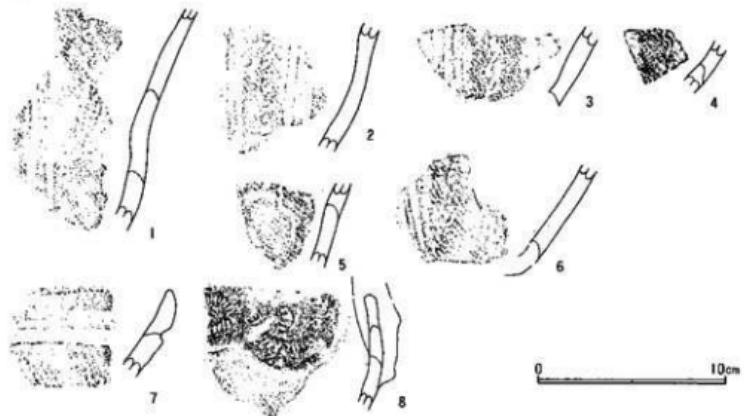
第10図 土器(4) ($S = 1/3$)



第11図 土器(5) ($S = 1/3$)



第12図 土器(6) ($S = 1/3$)



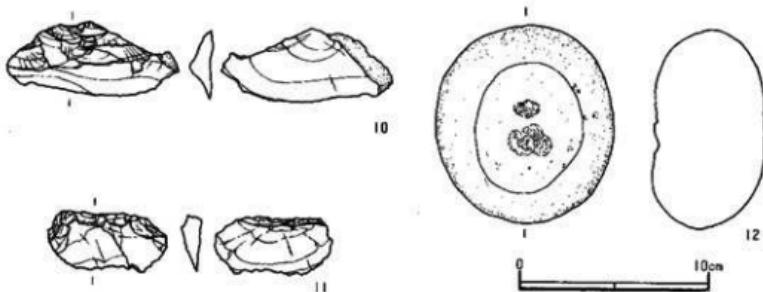
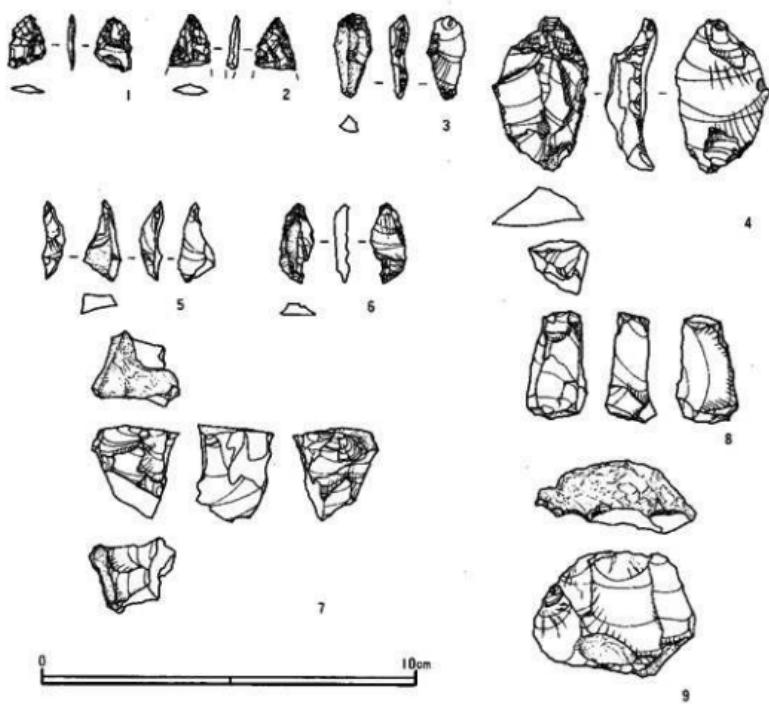
第13図 土器(7) (S=1/3)

第IV章 まとめ

縄文時代の人々が、出頭遺跡において生活を営むとすると、水源として考えられるのは、中ノ沢川と出頭水源と呼ばれる湧水地である。出頭水源がいつ頃から湧き出していたのかは不明であり、今回の調査中に遺物を表面採集することはなかったが、縄文時代にこの水源の近くに湧水があり、生活用水として使われていた可能性は否定できない。

遺跡地が狭いことからみて、この集落に住んだ人々の生活領域は、遺跡の東側に広がる扇状地か、もしくは西側に迫る守屋山系の中に求められる。遺跡東側に広がる扇状地には小飼通遺跡が存在し、出頭遺跡から出土した土器群とはほぼ同時期の土器が出土している(図版5-1)。また小飼通遺跡からは石棒など祭祀に関わる遺物の出土も伝えられており(図版5-2・3)、一定の規模をもった集落遺跡であると考えられる。小飼通遺跡が、出頭遺跡と同時期の遺跡である可能性も考えられることから、出頭遺跡を残した人々の主たる生活領域は、山にあったと考えたほうがよいと思われる。

第1号住居址では、柱穴を1基も検出することができなかった。掘り込みらしきものは確認されたが、縄文時代の住居址として一般に知られている竪穴式住居址であるとは考えにくい。3基確認された焼土の厚さは1cmから2cmと薄く、必要な時、任意に場所を選んで火を焚いたものと



第14図 石器 ($S=2/3$, 10~12±1/3)

考えられる。また焼土1・2の周辺からは土器が集中して出土している。分布範囲をみるとP₁内の焼土3を除いて、焼土と重複する事がない。土器と焼土との関係を示す資料はこの平面分布の状況のみであるが、P₂の上面に黄褐色土により貼床がなされていたことを考えると、焼土、土器の集中、貼床が組合わされた生活遺構だと考えてよいと思われる。出土した遺物は、竪穴住居址から出土する遺物と変わることろがなく、当時の祭祀に関連する遺構であると考えることは難しい。土器は深鉢のみであり、当時の生産用具である石器をみると資料数は少ないとはいえ、石鎌、石錐、打製石斧、凹石と一通りの道具がそろっていると考えてよい。石核、剥片碎片の出土から石器製作が行われていたと考えられる。出頭遺跡は遺跡範囲の内、ごく一部が調査されたのみであり、遺跡の性格を考えるうえで資料不足は免れないが、現時点では住居址として把握したこの遺構は、狩猟あるいは採集物の加工など、生業に関連した場であったと考えておきたい。出頭遺跡が生業に関連する遺跡であるとしても、集落からある程度離れた地点に設けられる出作り小屋や、移動途中のキャンプサイトであるのか、小飼通遺跡という集落の外れに作られた作業場であるのかといった疑問は残る。この疑問に答えるためには、出頭遺跡の残存部分の調査のほか、周辺の集落遺跡と目される小飼通遺跡の内容が明らかにされることが必要である。今後、小飼通遺跡地内において宅地造成等の開発が行われる際には、詳細な調査を行うことが望まれる。

引用参考文献

- 諏訪教育会 「神長守矢満實書留」「諏訪史料叢書」卷三
- 鳥居龍藏 1924 「諏訪史第一巻」
- 両角守一 1930 「伏見宮博英王殿下のお供をして諏訪郡下の遺跡を尋ねる」「史前学雑誌」2-3
- 両角守一 1930 「信州諏訪郡宮川村安国寺附近出土遺物の調査」「史前学雑誌」2-5
- 戸沢充則・宮坂昭久 1951 「宮川村晴ヶ峰発見の土器」「諏訪考古学」7
- 渡邊世祐 1954 「室町～織豊時代」「諏訪史第三巻」
- 諏訪史談会 1958 「茅野市宮川篇」「諏訪史讀要項16」
- 旧宮川村史編纂会 1959 「旧宮川村に於ける縄文式文化時代（附弥生式文化時代）遺跡」「旧宮川村史編纂会研究其の6」
- 藤森栄一 1965 「井戸尻」
- 旧宮川村史編纂会 1966 「大祝橋沢城史 信濃安国寺史」「旧宮川村誌編纂会研究其ノ20」
- 旧宮川村史編纂会 1966 「古墳調査表」「旧宮川村誌編纂会研究其ノ21」
- 山口 明 1984 「中部地方における前期末葉土器と鍋屋町式土器」「長野県考古学会誌」48
- 茅野市教育委員会 1986 「茅野市史 上巻 原始・古代」

図 版



1 遺跡遠景



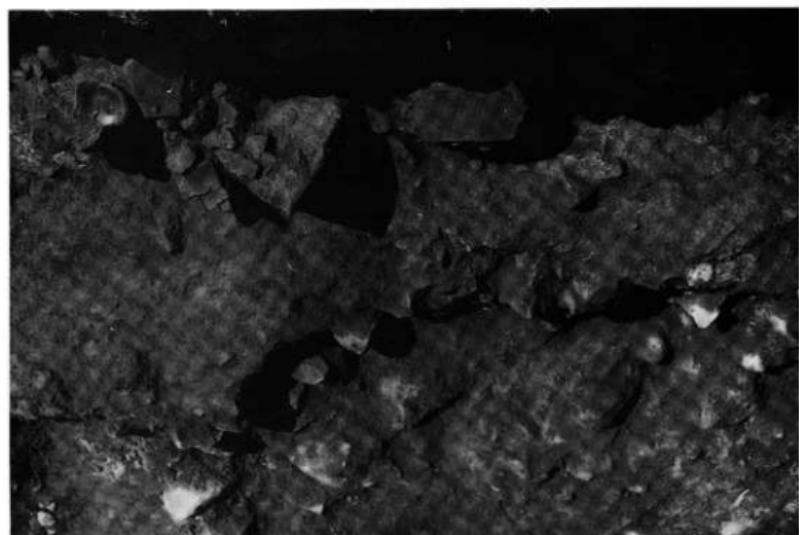
2 遺跡現況



1 重機作業風景



2 作業風景



1 第1号住居址遺物出土状況（東から）



2 第1号住居址断面（東から）



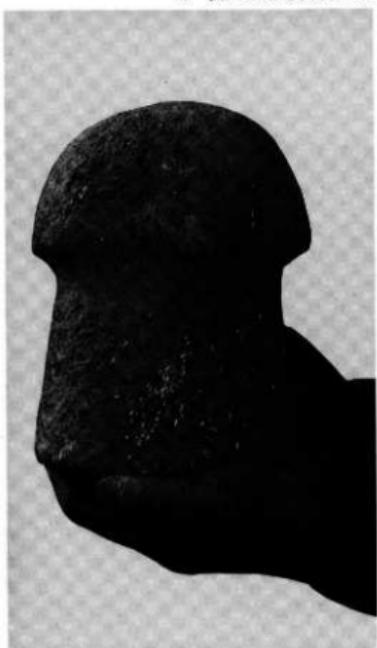
1 第1号住居址完掘状況（東から）



2 調査区全景（南から）



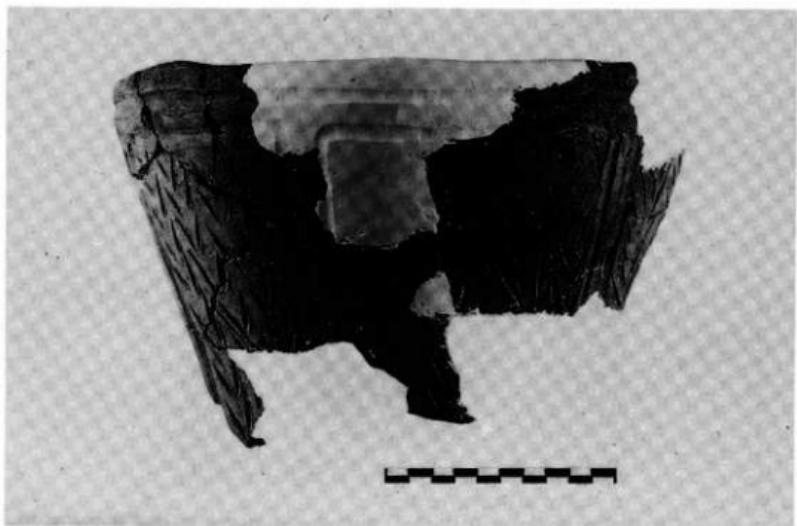
1 安国寺公民館所在の土器



2 小飼神社の石棒



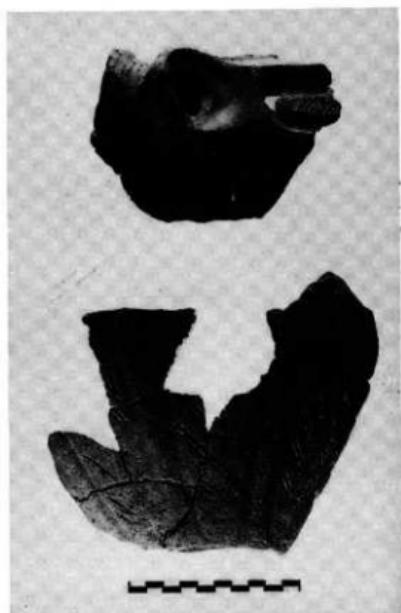
3 小飼神社



1 出土土器(1)



2 出土土器(2)



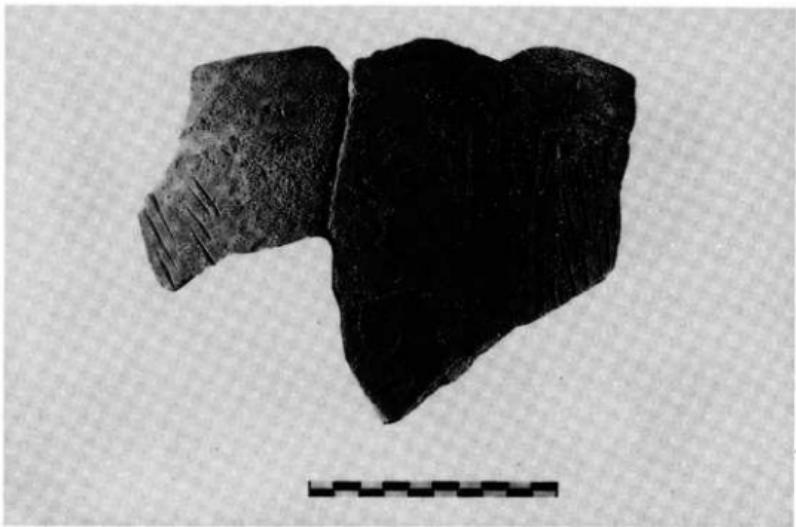
1 出土土器(3)



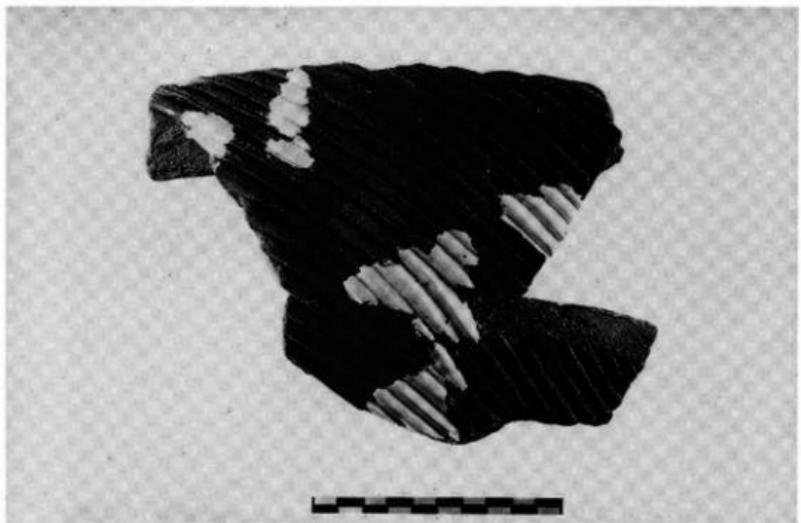
2 出土土器(4)



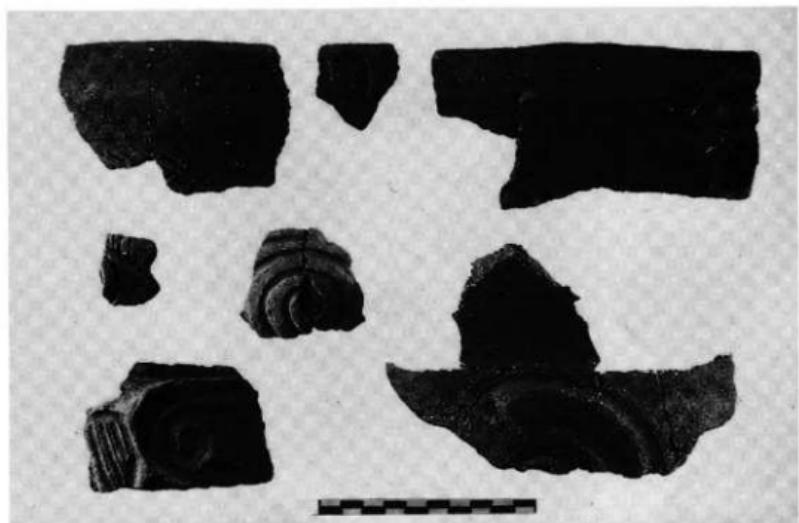
3 出土土器(5)



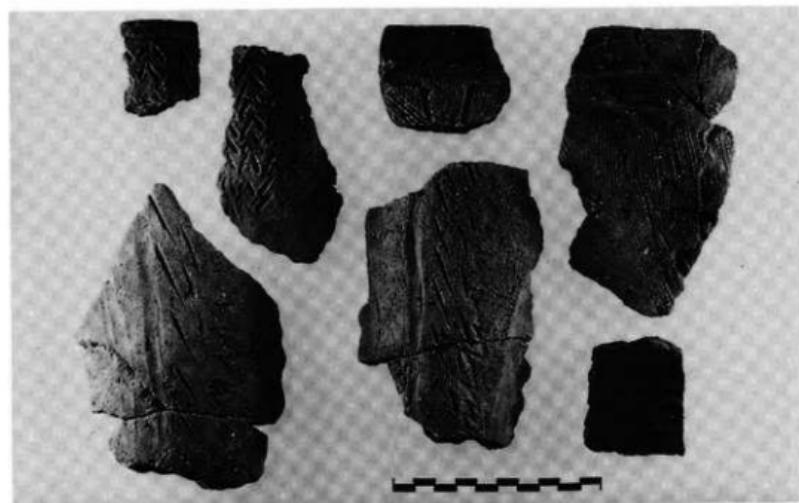
1 出土土器(6)



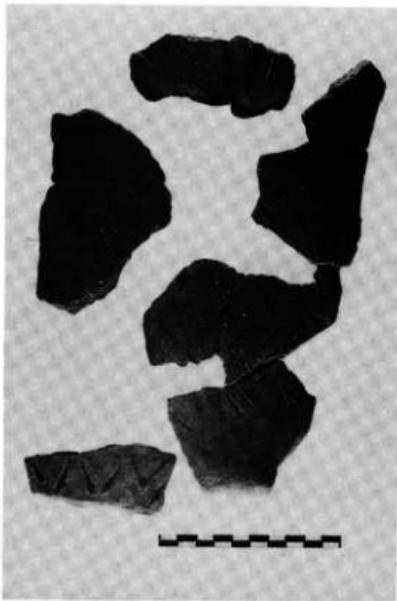
2 出土土器(7)



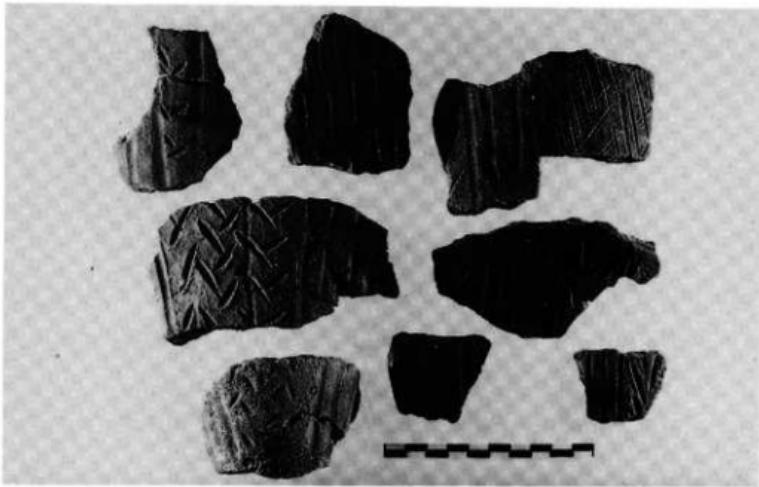
1 出土土器(8)



2 出土土器(9)



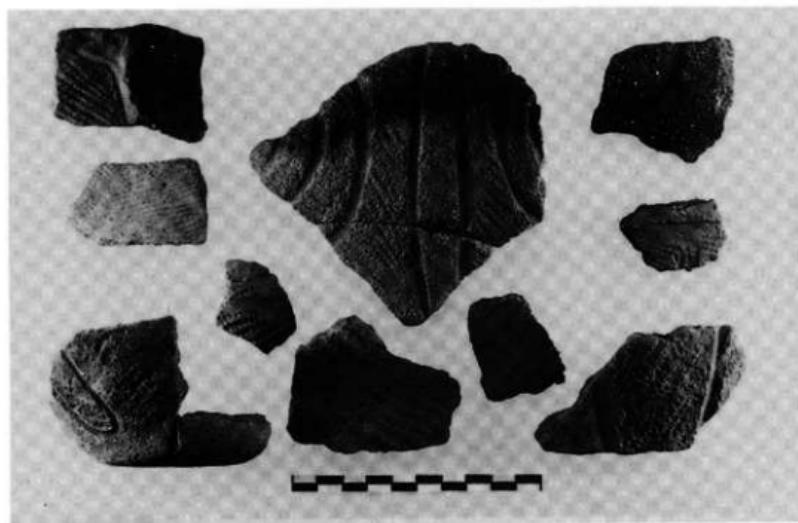
1 出土土器00



2 出土土器01



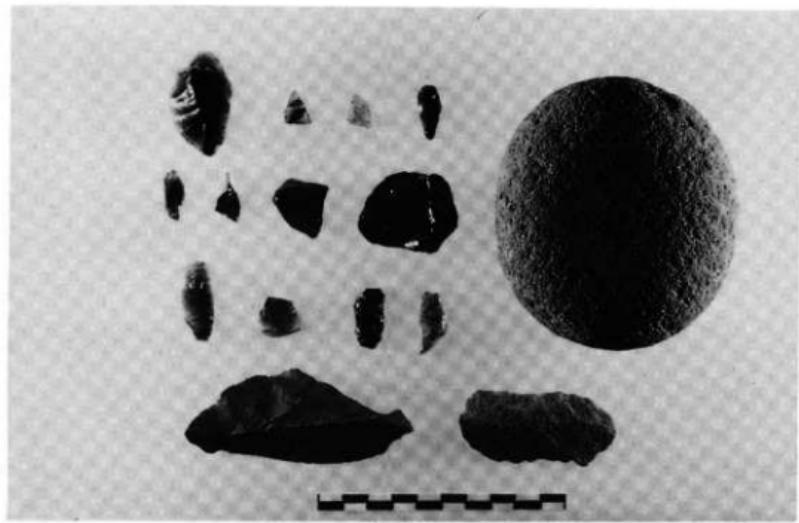
1 出土土器02



2 出土土器03



1 出土土器



2 出土石器

出頭遺跡

国道256号線道路改良事業に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

平成4年3月13日 印刷
平成3年3月18日 発行

編集発行 長野県茅野市塚原2丁目6番地1号
茅野市教育委員会
印刷 ほおづき書籍株式会社
